

3. 漁況予報調査研究費

1) 平成11年のアユ資源調査結果の概要

孝橋賢一・片岡佳孝・田中秀具・澤田宣雄・酒井明久

【目的】

琵琶湖産アユは琵琶湖漁業において漁獲量、漁獲高ともに第1位の重要魚種であるほかに、全国の河川放流や養殖の種苗としても重要である。そこで、湖産アユの資源状況を把握するため、過去よりアユの資源学的調査を継続実施し、漁況予報の資料としている。'99年も同様の調査を行い、過去の結果と本年の結果の比較を行った。

【方法】

産卵調査、ヒウオ生息状況調査、漁獲体型調査をこれまでと同様に行ったが、魚探調査については6月より月2回に頻度を増やして行った。

【結果】

1. 魚探調査

1月から7月の魚群数の平年比は9~156%と大きく変動したが、8月を除くと4月以降60%を大きく下回った。しかし産卵親魚を反映していると思われる8月の魚群の分布は平年値を大きく上回った。

2. 産卵調査（8月23日~11月2日）

河川状況は第1次調査より適度な通水があり、産卵ピーク時を含む第2~4次調査には第3次調査の一部河川を除いてアユの産卵環境としては良好に推移した。

産卵の開始時期は第2次調査前後の9月上旬で、産卵のピークは第3次調査前の9月中旬と思われる、どちらも平年並みであった。

総有効産着卵数は約296億粒で平年の165%と過去10年間で3番目の良好な産卵状況であった。

3. ヒウオ生息状況調査（10月7・8日、11月8・10日、12月8・9日）

採集されたヒウオの採集尾数は第1次調査では163尾（平年比59%）第2次調査では175尾（平年比60.5%）、第3次調査では59尾（平年比37.8%）と平年を大幅に下回った。平均体重は第1次調査で9.0mg（平年比49.8%）、第2次調査で35.3mg（平年比92.3%）、第3次調査で68.5mg（平年比112.8%）で、第1次、第2次調査においてはヒウオ曳の日程が早かったこともあり平年より下回った。しかし、調査日とヒウオ平均体重の関係をみるとほぼ平年通りといえた。

4. 漁獲体型調査

エリ漁獲アユの体長の平年比は、漁期はじめの11月下旬から5月までは95~101%とほぼ平年並みであったが、6月以降は117~118%となり、やや平年を上回った。ヤナ漁獲アユの体長の平年比は3、4月には106%とほぼ平年並みであったが、5~8月には113~120%と上回った。

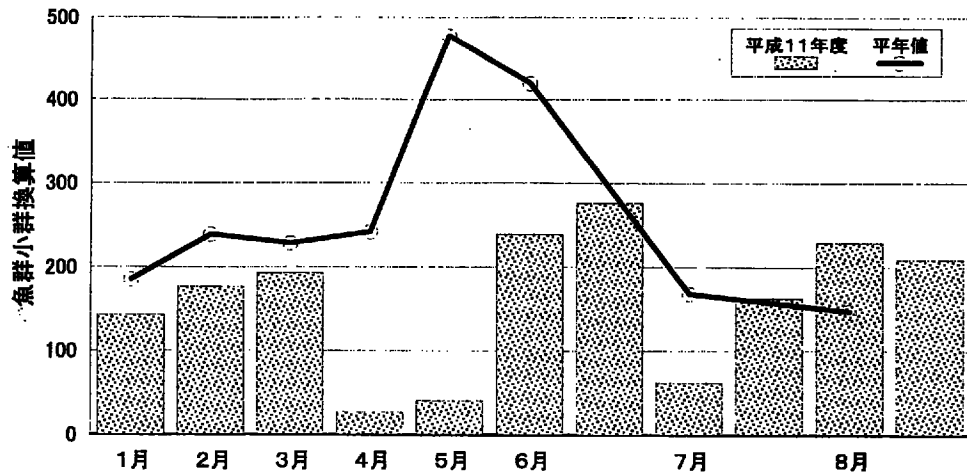


図1 魚探調査

表1 ヒウオ生息状況調査

	1 曳網平均採集尾数		
	平均値	平成11年	平年値比(%)
第1次調査(10月7, 8日)	276	163	59.0
第2次調査(11月8・10日)	289	175	60.5
第3次調査(12月8・9日)	157	59	37.8

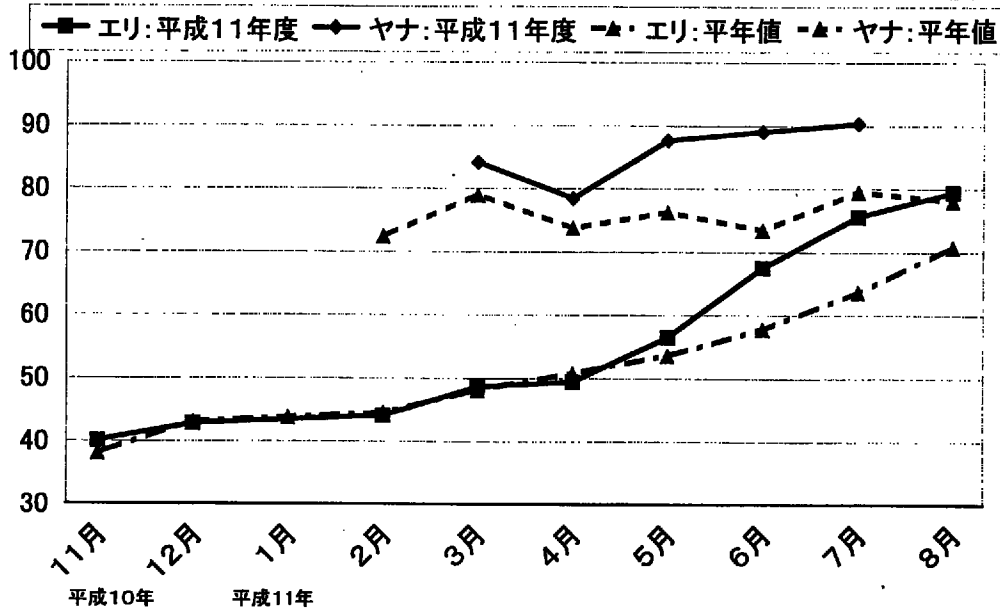
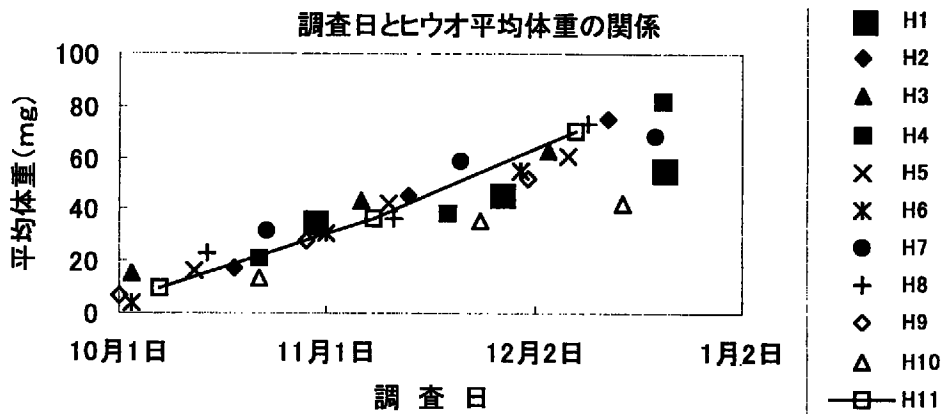


図2 漁獲体型の推移